

6月



あの日のあの川 リレー日記 ～第50話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第50話主人公 笹目慈音

(筑波大学 社会国際学群国際総合学類 4年 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：静岡県蓮台寺川)

「いつもそばにあった川」

いつのこと？： 5歳～18歳

どこの川？： 蓮台寺川

「蓮台寺」「稻生沢」こちらの漢字、読めますでしょうか…？ おそらく一つ目は簡単かと思います。そう、「れんだいじ」です。じゃあ二つ目、こちらはすこし難しいかもしれません。「いねなまさわ」？ 「いなせいさわ」？ 正解は、「いのうざわ」と読みます。いきなり皆さんに漢字クイズをするような文の書き出しになってしまいますみません。文章を書くことにはあまり慣れていないのですが、頑張って川の思い出を書いてみようと思います。少しの間、お付き合いください。

冒頭にご紹介したのは、私が生まれ育った場所の地名です。そして、その名前がついた川、蓮台寺川と稻生沢川が、私の

実家のすぐ近くを流れています。運台寺川は、数キロ先で稻生沢川に合流します。

正直、「あの日のあの川リレー」のバトンを官さんから引き継いだ時、「川との思い出、あったかな…」と少し考えてしまいました。というのも、先輩方が残されたリレーを見ていると、皆さんがそれぞれの思い出を持っているようで、それに比べて自分にはそうやって書けるほどの思い出が見当たらないと考えていたのです。しかし、それは大きな勘違いでした。むしろ、私のこれまでの人生に、川はずっと寄り添ってくれていたような気がしています。日常生活のすぐそばを、いつも緩やかに流れていたあの川の記憶を、少しずつ振り返ってみようと思います。

私が小学校に入学するくらいのタイミングで、私は現在の実家に引っ越しました。その時の記憶はあいまいですが、すぐそばに川が流れているということは、当時の幼い私にとってうれしかった記憶があります。そこから、川のある生活が始まりました。

私自身、小学生の頃は人とコミュニケーションをとることが上手ではなく、友人にいじめられてしまうことがありました。何度も泣きながら、一人家を目指して歩いた通学路、そのすぐそばを川が流れていました。正直苦い思い出ではありますが、その記憶の中ではいつも川のせせらぎが聞こえてきます。とても贅沢なことかもしれませんね。

その頃のことももう一つ覚えているのは、犬の散歩です。夕方、母が仕事から帰ってくると、犬の散歩によく一緒に出掛けました。時間が合えば、時々父も加わって一緒に散歩をしました。散歩をしながら、父母とたくさん話をしました。四季の変化を感じながら、ゆったりと川沿いを歩いたあの時間は、今でもずっと記憶に残っている大切な思い出の一つです。

時間が経ち、中学生・高校生になると、勉強や部活が忙しくなり、そんな時間も減っていました。かつて散歩をしながらゆっくり歩いていた川沿いの道は、体育の授業でマラソン練習をするためのコースになり、その練習がとてつらかったのを覚えています。この時を思い出して聞こえてくるのは、川のせせらぎなんかではなく、自分の足がコンクリートを蹴る足音と、今にも途切れそうな息継ぎの音。しんどかったなあ…。

そして、月日は流れ、18歳。受験が迫ってきました。自分の部屋にこもり、ひたすら問題集とにらめっこしていた自分。開け広げた窓から吹いてくる夜風を受けながら、ペンを走らせ、ノートを埋め、教科書をひたすらめくっていたそんな時間は、いま思い返すととても感慨深いものがあります。ふとペンを止め、大きく伸びをして窓の方に向かえば、聞こえてくるには、そう、川の音。やはりずっと生活の中に川があったのだと改めて気が付きました。大学に進学し、こうして川に関するゼミで学んでいることが、どこが運命づけられているようにも感じます。

大学進学をきっかけに、実家を離れての生活が始まりました。はじめのうちは頻繁に実家に帰ったものですが、最近ではほとんど帰ることが出来ていません。そして、いま世界中で猛威を振っている新型コロナウイルスの影響で、また帰ることが難しくなっていました。

この状況が収束したら、実家に帰ろうと考えています。そして、父母と一緒に犬の散歩に出かけようと思います。会えない時間に積もっていた話をしたり、川のせせらぎを聞きながらゆったりと季節を感じたり。その時間が待ち遠しい、今日この頃です。

(次は山口まりなさんにバトンを託します)